

国 語

1 全般的事項に関する質疑応答

問1 国語科で育成すべき資質・能力はどのようなものか。

新学習指導要領では国語科の目標を、次のとおり示している。

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす。
- (3) 言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

この目標は国語科の全体の目標であり、これが各科目の目標に個別化され、それぞれの科目の指導を行うこととなる。今回の改訂では、他教科等と同様に、国語科において育成を目指す資質・能力を「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱で整理し、それぞれに整理された目標を(1)、(2)、(3)に位置付けている。

「言葉による見方・考え方を働かせ」とは、生徒が学習の中で、対象と言葉、言葉と言葉との関係を、言葉の意味、働き、使い方等に着目して捉えたり問い直したりして、言葉への自覚を高めることであると考えられる。

「国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力」とは、国語で表現された内容や事柄を的確に理解する資質・能力、国語を使って内容や事柄を効果的に表現する資質・能力であるが、そのために必要となる国語の使い方を的確に理解する資質・能力、国語を効果的に使う資質・能力を含んだものである。

問2 国語科の教育課程の編成に当たって配慮すべきことはどのようなことか。

教育課程の編成に当たっては、原則として、共通必修科目である「現代の国語」及び「言語文化」を履修した後に選択科目を選択して履修させるものであることに留意して、共通必修科目の履修学年や選択科目の履修順序、履修学年などについて十分な検討を行い、生徒の特性や学校の実態等に応じた教育課程の編成や指導計画の作成を行うようにする必要がある。

選択科目相互の履修順序は新学習指導要領に示されていないが、「現代の国語」及び「言語文化」が総合的な言語能力を育成することを目指す共通必修科目として置かれていることから、各選択科目は、共通必修科目の「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」のそれぞれについて、各科目の性格や特性に応じて深化、発展を図る形で配置されていることに留意する必要がある。したがって、選択科目の指導計画の作成に当たっては、「現代の国語」及び「言語文化」の内容の各事項との十分な関連を図る必要がある。

なお、「原則として」とは、例えば、「現代の国語」、「言語文化」を2以上の連続する年次にわたって分割履修するような場合に、2年次目においては、選択科目を同時に履修することができることを可能とするものであるということである。

問3 各科目の指導計画を作成するに当たって、どのようなことに配慮すればよいか。

新学習指導要領では、1領域のみの「古典探究」を除く全科目において、「話すこと・聞くこと」、「書くこと」及び「読むこと」の各領域の授業時数を示している。各科目の指導計画を作成するに当たっては、示された授業時数を満たす計画とする必要がある。

なお、当該領域において育成を目指す資質・能力は言語活動を通して育成する必要があるが、従前と同じく、例えば、話合いの言語活動が、必ずしも「話すこと・聞くこと」の領域の資質・能力のみの育成を目指すものではなく、「書くこと」や「読むこと」における言語活動にもなりうることから、指導計画を作成する際は、育成を目指す資質・能力（目標）と言語活動とを同一視しないよう十分留意する必要がある。

各科目の「内容の取扱い」に示された各領域における授業時数

科目名（標準単位数）	〔思考力、判断力、表現力等〕		
	話すこと・聞くこと	書くこと	読むこと
現代の国語(2)	20～30単位時間程度	30～40単位時間程度	10～20単位時間程度
言語文化(2)		5～10単位時間程度	【古典】 40～45単位時間程度 【近代以降の文章】 20単位時間程度
論理国語(4)		50～60単位時間程度	80～90単位時間程度
文学国語(4)		30～40単位時間程度	100～110単位時間程度
国語表現(4)	40～50単位時間程度	90～100単位時間程度	
古典探究(4)			※

(※「古典探究」については、1領域のため、授業時数を示していない。)

2 現代の国語に関する質疑応答

問1 「現代の国語」の指導上の留意点はどのようなことか。

「現代の国語」は、実社会における国語による諸活動に必要な資質・能力の育成に主眼を置いて新設された共通必修科目であり、選択科目や他の教科・科目等の学習の基盤、とりわけ言語活動の充実に資する国語の資質・能力、社会人として生活するために必要な国語の資質・能力の基礎を確実に身に付けることをねらいとしている。

そのため、様々な言語活動を通して国語の資質・能力を身に付けることができるよう、「知識及び技能」においては、「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」、「(2)情報の使い方に関する事項」「(3)我が国の言語文化に関する事項」の3事項を、「思考力、判断力、表現力等」においては、「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」、「C読むこと」の3領域から内容を構成している。

この科目では、実社会に生きる国語の資質・能力の育成を目指すため、「知識及び技能」においては、「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」、「(2)情報の扱い方に関する事項」を充実させるとともに、「思考力、判断力、表現力等」においては、これまで指導が十分でないとされてきた表現力の育成を目指すため、「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」の指導事項を充実させていることに留意する必要がある。

また、「A話すこと・聞くこと」、「B書くこと」、「C読むこと」の指導については、それぞれ区別して計画する必要がある。領域ごとに指導のねらいを明確にした単元の指導と評価の計画を年間の指導と評価の計画に位置付けることが大切である。それぞれの領域の指導を科目の年間計画のどの位置に、どのように設定するかについては、生徒の実態に応じて各学校で適切に定めることが大切であり、その際、「知識及び技能」と3領域の指導との関連を図ることに留意する必要がある。

「C読むこと」の教材については、現代の社会生活に必要とされる論理的な文章及び実用的な文章とすることに留意する必要がある。

問2 「現代の国語」の目標にある「実社会」と、「言語文化」の目標にある「生涯にわたる社会生活」との違いはどのようなことか。

「現代の国語」の目標にある「実社会」とは、私たちが生きる現実の社会そのものであり、「実社会に必要な国語の知識や技能を身に付ける」とは、学校生活や身近な社会生活における様々な関わりを含みながらも、社会人として活躍していく高校生が、他者と関わる現実の社会において必要な国語の知識や技能について理解し、それを適切に使うことができるようにすることを示している。

「言語文化」の目標にある「生涯にわたる社会生活」とは、高校生が日常関わる社会に限らず、現実の社会そのものである実社会を中心としながらも、生涯にわたり他者や社会と関わっていく社会生活全般を指している。こうした広く社会生活全般を視野に入れ、社会人として活躍していく高校生が、生涯にわたる社会生活において必要な国語の知識や技能について理解し、それを適切に使うことができるようにすることを示している。

3 言語文化に関する質疑応答

問1 「言語文化」の指導上の留意点はどのようなことか。

「言語文化」は上代から近現代に受け継がれてきた我が国の言語文化への理解を深めることに主眼を置き新設された共通必修科目であり、選択科目や他の教科・科目等の学習の基盤、とりわけ我が国の言語文化の担い手としての自覚を涵養し、社会人として生涯にわたって生活するために必要な国語の資質・能力の基礎を確実に身に付けることをねらいとしている。

そのため、様々な言語活動を通して国語の資質・能力を身に付けることができるよう、「知識及び技能」においては、「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」、「(2)我が国の言語文化に関する事項」の2事項を、「思考力、判断力、表現力等」においては、「A書くこと」、「B読むこと」の2領域から内容を構成している。

この科目では、我が国の言語文化に対する理解を深めるための国語の資質・能力の育成を目指すため、「知識及び技能」においては、「(1)言葉の特徴や使い方に関する事項」、「(2)我が国の言語文化に関する事項」を充実させるとともに、「思考力、判断力、表現力等」においては、「B読むこと」の指導事項を充実させ、言語文化に関する表現力の育成を目指すため、「A書くこと」の指導事項を充実させていることに留意する必要がある。

また、「A書くこと」、「B読むこと」の指導については、それぞれ区別して計画する必要があり、領域ごとに指導のねらいを明確にした単元の指導と評価の計画を年間の指導と評価の計画に位置付けることが大切である。それぞれの領域の指導を科目の年間計画のどの位置に、どのように設定するかについては、生徒の実態に応じて各学校で適切に定めることが大切であるが、その際、「知識及び技能」と2領域の指導との関連を図ることに留意する必要がある。

「B読むこと」の教材は、古典及び近代以降の文章とし、日本漢文、近代以降の文語文や漢詩文などを含めるとともに、我が国の言語文化への理解を深める学習に資するよう、我が国の伝統と文化や古典に関連する近代以降の文章を取り上げる必要があり、また、必要に応じて、伝承や伝統芸能などに関する音声や画像の資料を用いることができる。

問2 「現代の国語」と「言語文化」の目標には、どちらにも「我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、言葉を通して他者や社会に関わろうとする態度を養う」という言葉があるが、どのような意味の違いがあるのか。

我が国の言語文化とは、我が国の歴史の中で創造され、継承されてきた文化的に高い価値をもつ言語そのもの、つまり、文化としての言語、また、それらを実際の生活で使用することによって形成されてきた文化的な言語生活、さらには、古代から現代までの各時代にわたって、表現し、受容されてきた多様な言語芸術や芸能などを広く指している。

「現代の国語」では、これらのうち、現代社会に生きて働く言語の価値に重点を置き、「言語文化」では、文化としての言語、文化的な言語生活、多様な言語芸術等に重点を置いている。

4 論理国語に関する質疑応答

問1 「論理国語」の指導上の留意点はどのようなことか。

「論理国語」は、共通必修科目である「現代の国語」及び「言語文化」により育成された資質・能力を基盤とし、主として「思考力・判断力・表現力等」の創造的・論理的思考の側面の力を育成する科目として、実社会において必要となる、論理的に書いたり批判的に読んだりする資質・能力の育成を重視している。

この科目では、実社会や学術的な学習の基礎に関する事柄について、根拠や論拠の吟味を重ねたり文章全体の論理の明晰さを確かめたりして論理的な文章や実用的な文章を書く指導事項、資料との関係を把握したり、主張を支える根拠や結論を導く論拠を批判的に検討したりして論理的な文章や実用的な文章を読む指導事項を設けるとともに、課題を設定して探究する指導事項を設けていることに留意する必要がある。

「B読むこと」の教材は、近代以降の論理的な文章及び現代の社会生活に必要とされる実用的な文章とする必要があり、また、必要に応じて、翻訳の文章や古典における論理的な文章などを用いることができる。

5 文学国語に関する質疑応答

問1 「文学国語」の指導上の留意点はどのようなことか。

「文学国語」は、共通必修科目である「現代の国語」及び「言語文化」により育成された資質・能力を基盤とし、主として「思考力・判断力・表現力等」の感性・情緒の側面の力を育成する科目として、深く共感したり豊かに想像したりして、書いたり読んだりする資質・能力の育成を重視している。

この科目では、読み手の関心が得られるような、独創的な文学的文章を創作するなどの指導事項、文学的文章について評価したりその解釈の多様性について考察したりして自分のものの見方、感じ方、考え方を深めるなどの指導事項を設けるとともに課題を自ら設定して探究する指導事項を設けていることに留意する必要がある。

また、「B読むこと」の教材は、近代以降の文学的文章とする必要があり、また、必要に応じて、翻訳の文章、古典における文学的文章、近代以降の文語文、演劇や映画の作品及び文学などについての評論文などを用いることができる。

6 国語表現に関する質疑応答

問1 「国語表現」の指導上の留意点はどのようなことか。

「国語表現」は、共通必修科目である「現代の国語」及び「言語文化」により育成された資質・能力を基盤とし、主として「思考力・判断力・表現力等」の他者とのコミュニケーションの側面の力を育成する科目として、実社会において必要となる、他者との多様な関わりの中で伝え合う資質・能力の育成を重視して新設した選択科目である。

「A話すこと・聞くこと」に関する指導については、必要に応じて、発声や発音の仕

方、話す速度などを扱うことについて留意する必要がある。発声や発音の仕方は、相手に内容を正確に伝えるために重要であり、話す速度、言葉の抑揚や強弱、間の取り方は、話の中心や話す場面を意識して話し方を工夫する上で重要である。

「B書くこと」に関する指導については、必要に応じて、文章の形式などを扱うことに留意する必要がある。文章の形式とは、文章の構成の仕方、論の進め方、段落の作り方、箇条書きや項目分けの仕方、見出しの付け方など、それぞれの文章の目的に応じて一般的に用いられるようになっている書式やスタイルのことである。

とりわけ、企画書や報告書、手紙や電子メールなどの実用的な文章の場合には、目的をうまく遂行できるようにするために、一定の形式が成立していることが多い。これらを活用していくと、必要な情報が漏れ落ちることなく、読み手の心理の動きに沿った構成の文章が書けるようになり、文章作成の効率化を図ることができる。文章の形式の習得は、実社会に必要な国語の知識や技能の一つである。このことについては、小学校、中学校及び共通必修科目「現代の国語」と一貫して指導してきているが、その一層の充実を図ることが大切である。

「A話すこと・聞くこと」の教材は、必要に応じて音声や画像の資料などを用いることができる。なお、その際は、音声や画像の特徴を理解した上で、指導のねらい、生徒の興味・関心、指導の段階や時期などに配慮し、親しみやすく効果的なものを用いることが大切である。

7 古典探究に関する質疑応答

問1 「古典探究」の指導上の留意点はどのようなことか。

「古典探究」は、共通必修科目「言語文化」により育成された資質・能力のうち、「伝統的な言語文化に関する理解」をより深めるため、ジャンルとしての古典を学習対象とし、古典を主体的に読み深めることを通して伝統と文化の基盤としての古典の重要性を理解し、自分と自分を取り巻く社会にとっての古典の意義や価値について探究する資質・能力の育成を重視して新設した選択科目である。

この科目では、小学校、中学校及び共通必修科目「言語文化」の指導との一貫性を図り、伝統的な言語文化に関する課題を設定して探究したり、我が国の文化の特質や我が国の文化と中国など外国の文化との関係について考察したりして、古典への興味や関心を広げることを重視している。

文語のきまりや訓読のきまりなどの文語文法の指導は、古典の作品や文章を読みを確かなものにし、深く読み味わったりするために行うという、これまでと変わらない原則的な考え、つまり、文語文法の指導は、古典などを読むために必要な指導を、読むことの学習に即して行うという考え方を踏まえて指導することに留意する必要がある。

また、「A読むこと」の指導においては、古文及び漢文の両方を取り上げるものとし、一方に偏らないようにする必要がある。

「A読むこと」の教材は、古典としての古文及び漢文とし、日本漢文を含めるとともに、論理的に考える力を伸ばすよう、古典における論理的な文章を取り上げる必要があり、また、必要に応じて、近代以降の文語文や漢詩文、古典についての評論文などを用いることができる。

8 「北海道高等学校学力向上実践事業」学力テストの分析

(1) 全道の概況と課題

右の表は、「平成30年度北海道高等学校学力向上実践事業」の学力テストの結果について、モデルごとに領域等別の正答率を示したものである。なお、本学力テストの科目は、「国語総合」である。

Cモデルは、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の正答率が49.5%で、3領域の正答率と比べて低くなっている。特に、学習指導要領の指導事項イ(ア)「国語における言葉の成り立ち、表現の特色及び言語の役割などを理解すること」の力をみることわざの理解に関する問題の正答率が最も低かった。

Bモデルは、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の正答率が48.8%で、「C読むこと」の領域と比べて低い結果となっている。特に、学習指導要領の指導事項イ(イ)「文や文章の組み立て、語句の意味、用法及び表記の仕方などを理解し、語彙を豊かにすること」の力をみる問題の正答率が最も低かった。

Aモデルは、「B書くこと」の正答率が27.5%で、他の領域等の正答率よりも低く、無回答率も高かった。

Cモデル	
領域等別	正答率
A 話すこと・聞くこと	86.0%
B 書くこと	68.0%
C 読むこと	59.8%
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	49.5%

Bモデル	
領域等別	正答率
C 読むこと	62.1%
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	48.8%

Aモデル	
領域等別	正答率
B 書くこと	27.5%
C 読むこと	44.0%
伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	43.1%

(2) 改善の方向性

Cモデル及びBモデルで課題となっている「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」については、実際に話したり書いたり読んだりする場面において、生きて働く「知識及び技能」として習得できるよう計画することが大切である。そのため、指導に当たっては、生徒が、日常の言語活動の中にある言葉の特徴やきまりなどに気付くことや、学習したことを日常生活における、話したり聞いたり書いたり読んだりする場面に生かすことを意識しながら学習できるようにすることが重要である。また、Aモデルで課題となっている「書くこと」の指導については、情景や心情の描写を取り入れて、詩歌をつくったり随筆などを書いたりする言語活動や、出典を明示して文章や図表などを引用し、説明や意見などを書く言語活動を通して、適切に行う必要がある。

これら、「北海道高等学校学力向上実践事業」学力テストの結果から分かる課題や、中央教育審議会答申で指摘されてきた、①話合いや論述などの「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域の学習が十分に行われていないこと、②古典の学習について、日本人として大切にしてきた言語文化を積極的に享受して社会や自分との関わりの中でそれらを生かしていくという観点が弱く、学習意欲が高まらないことなどを踏まえ、次に示す実践事例等を参考にすることで、各学校の実態に即した指導の改善を図る必要がある。

9 新学習指導要領を踏まえた現行学習指導要領における実践

1 単元名 言葉の多義性に着目して、短歌を創作しよう。		
2 単元の目標 <ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いが効果的に伝わるよう、描写や語句などの表現の仕方を工夫しようとする。(関心・意欲・態度) ・自分の思いが効果的に伝わるよう、描写や語句などの表現の仕方を工夫する。(書く能力) ・表現の特色及び言語の役割を理解する。(知識・理解) 		
3 取り上げる言語活動と教材 <p>(1) 言語活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・優れた和歌(短歌)に用いられている語句の多義性について考え、説明する活動。 ・語句の多義性を生かした短歌を創作する活動。 <p>(2) 教材(例)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・贈答歌(『和泉式部日記』等) / 現代短歌(俵万智『サラダ記念日』等) 		
4 単元の具体的な評価規準		
関心・意欲・態度	書く能力	知識・理解
・描写するとき、比喩をはじめとした表現の技法を適切に用いて書こうとしている。	・描写するとき、比喩をはじめとした表現の技法を適切に用いて書いている。	・語句の意味には広がりがあり、文脈との関連において用いる語句を適切に選ぶ必要があることを理解している。
<p>本単元においては、「書く能力」の育成を目指し、語句の多義性を生かした短歌を創作する学習活動を設定している。この活動を通して、優れた和歌(短歌)に用いられている語句の多義性に気付いたり、自分の思いが効果的に伝わるよう表現の仕方を工夫したりできるようにする。(関連する学習指導要領の指導事項「国語総合」内容「B書くこと」のウ)</p>		
5 単元の指導計画		
次	学 習 活 動	言語活動に関する指導上の注意点
第1次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 単元の学習の見通しをもつ。主 ○ 用いられている語句の多義性に着目して、優れた和歌(短歌)を鑑賞する。個人→グループ学習 対 <ul style="list-style-type: none"> ・古典和歌～贈答歌～(『和泉式部日記』) <ul style="list-style-type: none"> A 薫る香によそふるよりはほととぎす 聞かばや同じ声やしたると(和泉式部) B 同じ枝に鳴きつつをりしほととぎす 声は変はらぬものと知らずや(帥の宮) ・現代短歌(『サラダ記念日』) <ul style="list-style-type: none"> C 思い出の一つのようでそのままに しておく麦わら帽子のへこみ(俵万智) ○ 「ほととぎす」「麦わら帽子のへこみ」という語句のもつ文脈上の意味を考え、説明する。ペア→全体学習 対 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉には意味の広がりがあることに着目して、短歌の鑑賞や創作をすることを予告する。 ・生徒の状況に応じて、和歌を鑑賞するために必要な情報(歴史的事実・背景・人間関係・口語訳等)を提示する。 ※鑑賞する和歌(短歌)の心情を象徴する語句の文脈上の意味(想定される生徒の意見) <ul style="list-style-type: none"> Aほととぎす: 帥の宮に会いたい気持ち Bほととぎす: 和泉式部を慕う気持ち C麦わら帽子のへこみ: 思い出深い夏が過ぎ去ることを寂しく思う気持ち
第2次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 語句の多義性に着目して、自分の思いを短歌で表現する。個人学習 主 深 <ul style="list-style-type: none"> ・テーマ: 「身近な人への思い」 ・条件: 身近な人との思い出の物を盛り込むこと ○ 共有フォルダの中の「創作した短歌と短歌の説明文」(Excelファイル)に各自で入力する。ICTの活用 	<ul style="list-style-type: none"> ・短歌の他に、身近な人との思い出の物に込めた心情を説明する文を書くよう指示する。 ・事前に、生徒がアクセスできる共有フォルダの中に、縦に氏名の欄を、横に短歌、短歌の説明文、評価の欄を配したExcelファイルを作成しておく。
第3次	<ul style="list-style-type: none"> ○ 創作した短歌を相互評価する。グループ→全体学習 <ul style="list-style-type: none"> ・印刷した「創作した短歌と短歌の説明文」(Excelファイル)を基に、グループで短歌を相互評価する。 ・優れた短歌について、クラス全体で共有する。 ・単元の学習を振り返り、学習の成果と課題を整理する。対 深 	<ul style="list-style-type: none"> ・相互評価の評価規準は、「身近な人との思い出の物を盛り込んで、身近な人への思いが適切に表現できているか」であることを指示する。 ・学習の振り返りを行い、自己の変容に気付かせる。

主…主体的な学び **対**…対話的な学び **深**…深い学び